

葦原

* 孤雁

* 前作行
アキ

六日の影うすれを葦原の上一帯、いづれとも
 けく夕の風が飒然と吹起ると、秋は淋しい武
 藏野のたがめが身ににみせて、
 雑木に鳴く鳥の
 聲も何となく物悲しく、遠くのはてに影かす
 かた甲斐が峯の姿もをぼら渡傭はすおすがと
 ちって、一人あてもなく葦原の中をさまよひ
 待たぬ風の音を聞き鳥の歌をきいながら、一本
 高い榊樹の下に身を寄せ、夕映の蒼色

候

の末に思をよせてゐた。

暫くすると、何処からともなく人聲のするや

う、^{てある}は思つたよ、葦の葉づれの音だらうとま

ぎらばせてゐると、少しもまた聞えをきか

今度は一層明に女の聲のやうだ。しかし、^{ちいさ}た

を耳のにも物憂いので自分は一^{ちいさ}條の蘆はし

い蘆の末が葦原のはてに靡きかいて、^{ちいさ}其あ

かりに消えてゆく風の行^{ちいさ}を見送つてゐ

た。

すゝで、自分の立つてゐる向の方から葦の葉